

## *Tess of the d'Urbervilles* における Hardy の世界観

大 榎 茂 行

(1)

Hardy は、いわゆる Victoria 時代の「教養ある紳士」に代表される樂觀的 moral に反対し、Darwin, T. Huxley 等によって新しく興った科学、哲学等の影響から、人間存在の最も基本的な局面から人間性を追求しようとしてきた。即ち、彼は、人間を個々の人間としてみるよりも、むしろ種の代表として見て彼等の存在を決定づける究極的なものとの関係に於て追求した。例えば Eustacia はその誇り高い自我とその置かれた自然環境との葛藤からその存在を失う悲劇となり、Henchard はその強烈な性格と運命とも言うべき 'Some Power above us' との関係に打ち倒されて行くという皮肉な人間の悲劇となっている。'The conflict of two forces—the inherent will to enjoy and the circumstantial will against enjoyment'<sup>1)</sup> が彼の主題である。*Tess of the d'Urbervilles* も、この意味に於て同じと言えるが、そこにはこれまでと違う意味が見出されるのである。L. Abercrombie は Hardy の主要六作品を Dramatic Form と Epic Form に分けて *Tess of the d'Urbervilles* を Epic Form に入れ、Dramatic Form を string quartette に、この Epic Form を violin solo にたとへ、人生に対する intellectual and emotional overtone をこの Epic Form で聞くことが出来ることを指摘

1) Lascelles Abercrombie: *Thomas Hardy a Critical Study* (London, Martin Secker, 1927) p. 102

している。即ち *Far from the Madding Crowd*, *The Return of the Native*, *The Mayor of Casterbridge*, *The Woodlanders* 等では、人生諸事の complexity を用いてその primal discord を追求し、冷淡に知的観念のもとにこの conflict を悲劇へと解決してきた。これに満足し切れず、*Tess of the d'Urbervilles* で更に emotional judgement of life を加えて「自分の結論」を述べるようになり、これが又芸術的表現を要求するに至ったのだと述べている。<sup>1)</sup> plot が Tess を中心にいわゆる Epic Form になっているのもその為であろう。従って Tess の一生を通じて Hardy の人生に対する見解が至る所に秘められており、それが又彼の抒情的表現に支えられて、この一篇を Hardy 芸術の傑作の一つたらしめている。従ってここで Tess の悲劇的な生涯の跡を辿ってその意味を調べてみるのが、Hardy の世界により近づくことになるであろう。

## (2)

以上述べたように、作品構成上から見ると従来の Hardy の作品と違って Tess という単一の主人公の苦悩の生涯から成っている。しかもその苦悩や破綻は、例えば *Macbeth* や *Hamlet* に見られるような偉大な性格や強烈な自我によって自から行動し、自から犯した誤りの結果と対決して行く崇高な悲劇的生涯ではない。この作品は Tess という主人公に対して様々な外部的要素がその人物の内部的要素と因果関係のもとに加わり合ってそれ等が終局へと展開して行く。即ちどちらかと言えば外部的要素が中心となって story を展開して行く。そこで如何なる外部的要素が Tess の生涯を決定づけて行くかを先づ考察し、Hardy の世界観をみようと思う。

五月も末のある夕方、田舎の娘達と May-Day dance の club-walking に興じる Tess は ‘…, for all her bouncing handsome womanliness, you could sometimes see her twelfth year in her cheeks, or her ninth sparkling from her eyes; and even her fifth would flit over the curves of her

1) Ibid. p. 91~p. 97

mouth'. (p. 14)<sup>1)</sup> と述べられている程精神的に純粹で innocent であり、父親が皆から笑われるのに対して 'I won't walk another inch with you, if you say any jokes about him.' (p. 14) と叫ぶ程家庭思いのおとなしい乙女 'a mere vessel of emotion untinged by experience' に過ぎない。このような Tess が苦悩と忍従の生涯の果、遂に殺人まで犯して処刑台の露と消えていった運命の皮肉はどこに源を發したのであろうか。疲れ果てて家路を辿る Tess の父親が牧師から 'Good night, Sir John.' と一声かけられたことから自分が名門 d'Urbervilles の末裔だと知り、その事から Tess の一切の生涯が決ってくるのである。父親の代りに真夜中に馬車を走らすようになったのも、新興成金 Alec d'Urberville を訪れ決定的な打撃を受けるのも牧師の 'It was only my whim' と言う気まぐれの衝動からである。Hardy はこれを '...our impulses are too strong for our judgment sometimes.' (p. 5) と述べている。この 'impulse' は我々の理性、知性ではとうてい説明のつかないもので意識外にある本能的なものかも知れない。ここに人間自体のことでありながら自分の意志ではどうにもならない「ある力」の存在を明確に提示している。これは決して善だとか悪だとかいうものではない。それを超越した「あるもの」である。これは又 Tess の生涯を決定づける Alec との一件にも用いられている。Tess が嫉妬に狂う女達に巻込まれて困っている所に Alec が馬で現れる。危機を感じて避けていた Alec なのに、とっさにその馬にかけ乗ってしまう。'...she abandoned herself to her impulse, climbed the gate, put her toe upon his instep, and scrambled into the saddle behind him.' (p. 85) この結果致命的な純潔を奪われることになるが、この 'impulse' のために自からその中へ飛び込んで行くことにさえなる。このように牧師の「ほんの気まぐれ」が父を酔わせ、Tess をして真夜中に馬車を走らせ、馬 Prince の死となり、その罪の意識から両親の虚栄心の犠

1) Thomas Hardy: *Tess of the d'Urbervilles* (Macmillan, Pocket Edition, 1954) p. 14

以下本文中ページ数のみ記入した引用文は、この Text による。

牲になり Alec の所へ親戚名乗りに行くという風に次々と決定的な瞬間へと Tess を進ませることになる。このように人間の衝動でありながらどうにもならない力で我々の生涯が決定づけられて行く。これに対して如何なる説明が可能であろうか。Hardy はこの理解し難い衝動の結果生じる出来事に対し ‘…it was doomed to receive.’ (p. 93) と述べ運命という言葉で説明している。即ち我々にかかわりのない「ある意志」を感じとり我々人間はそれに従って「なる様になった」んだとしている。その結果 Tess が Alec に犯されたのに対し Hardy は ‘…where was Tess’s guardian angel? where was the providence of her simple faith?’ と叫び、この間の事情を ‘…many thousand years of analytical philosophy have failed to explain to our sense of order.’ (p. 93) と述べている。ここで Hardy は従来の「神は絶対である」とか「神は愛なり」とかいった楽観的宗教観に不信を示し、人間尊重、個人絶対の moral に反対し、如何なる哲学も解明し得ない善悪をこえた「ある意志」に人間が支配されていることを明示している。

さて Tess をこのような苦悩に追い込んだのは根本的には Hardy の思想からくるこの「ある盲目的衝動」という運命によるものであることを述べたが、それは Tess の運命を方向づける契機であるが総てではない。Tess 及び家族のおかれている環境も見逃すことは出来ない。即ち Tess が真夜中の二時にでも土曜の市に間に合うように出かけねば蜜蜂の買手がなくなり一家が支えられないという貧困、旧家の名門であり、豪華な地主と親戚であることを誇示し、そこに何等かの生活の夢でも託さなければならぬようにまで追いつめられた生活苦、馬一頭が彼等の全財産で収入源であるとか、家屋づき地所の賃貸借契約期限が三代に限られ、Tess の父親の死で何処かへ移動せねばならない等という当時の農村の衰微が Tess を不幸へ追い込んだと言えることである。‘These families, who had formed the backbone of the village life in the past, who were the depositaries of the village traditions, had to see refuge in the large centres; the process, humorously designated by statisticians as ‘the tendency of the rural population towards the

large town'; being really the tendency of water to flow uphill when forced by machinery.' (p. 455) と述べられているように、Tess の苦しみの背後には当時の文明に追われる農村問題が含まれているのである。Douglas Brown は Tess を 'the agricultural community in its moment of ruin'<sup>1)</sup> そのものであるとしているが、この当時の農村の宿命を Tess は背負っている。今迄運命に耐えていた農民に人間の安定をみていた Hardy は、都会文明とか教養に対する一層の反発と共に今迄なかった人間存在の悲哀を Tess を通して表わしていると思える。

更に Tess の生涯を決定的に死まで追い込んだのは Angel Clare である。彼は都会文明の代表として現れ、「愛」の問題を通して Tess に「生」を与えておいてそれを否定したのである。Douglas Brown の言葉を借りれば 'impersonal agent of destruction' である。<sup>2)</sup> 即ち福音主義者で熱烈な実践家である牧師を父に持ち、教会と大学に凝り固った二人の兄は、大学族でも教会族でもない何千万というくだらない人間がこの文明社会にいるのだと承認し、そういう連中は尊敬してやる必要がない等と考え、既成道徳や知性の理想に固まっている。その中に育った Clare は大学を出たけれど満足しきれず真の人生、真の自由な命を求めて農業経営に従事している。そして彼は Cric 氏の犬搾乳場で Tess に合いその女性としての活力、現身に特に色白の頬や口元を含めて Tess の精神的純粋さに全く心を奪われる。'what a fresh and virginal daughter of Nature that milkmaid is!' (p. 157) と叫び恋するようになる。彼は 'Life, felt by only the great passionate pulse of existence, unwrapped, uncontented' のみを見つめて来たと思っているが、彼の实体はやはり生来の論理的知性で Tess を愛しているのであって自分の血肉から愛しているのではないことに気がつかない位論理的 egoist である。H. C. Duffin は '...though the substance of Clare's desire is Passionate,

1) Douglas Brown: *Thomas Hardy* (Longmans, 1961) p. 91

2) Ibid. p. 94

the methods of his thought are Intellectual...<sup>1)</sup> であるとしているがまさしくその通りである。自分の London での放蕩は自分で何等傷つくものでもなく、恥さえも知らない。それ故簡単に告白し、Tess の告白に対しては理性ではどうにもならない本能的感情で Tess が許せない。‘I repeat, the woman I have been loving is not you’ と言い、結局世間の因襲を脱することの出来ない偽善者であり over-intellectual で egoist である。こう言う Clare の情熱に対して錯覚を起し全身を賭けて愛した Tess は当然裏切られる。それ故 Tess は「愛」故に生きながら愛故に苦しむのである。ここに Hardy の恋愛に対する見解が窺われる。即ち Alec と Tess, Clare と Tess の関係には決して一致する如何なるものも本質的にないということである。‘...it was not the two halves of a perfect whole that confronted each other at the perfect moment; a missing counterpart wandered independently about the earth waiting in crass obtuseness till the late time came. Out of which maladroit delay sprang anxieties, disappointments, shocks, catastrophes, and passing-strange destinies’ (p. 50) と Alec との出会で述べているが Clare に於てもこのことが言える。このように Hardy は殆ど総ての作品で恋愛を扱っているが結ばれたのは Fancy と Dick その他田園の精のようなごく少数に過ぎない。この愛に於ける primal discord は Hardy の思想の決定的要素である。即ちここで注意せねばならぬのはその出会う相方が田園の代表的人物と都会の人物との出合であることである。換言すれば感情に対する理性であり、肉体に対する精神である。Clare に抱かれて川を渡る Tess はその感情の高ぶりに頬は燃え男の目を見ることが出来ないが、Clare は自分が不当に偶然な姿勢を利用しているとして感情を控える理性的な所がある。一見完全に一致している様に見えるが実体は異なるという形にしか恋愛を捉えていないし、そこに Hardy の意図があり又恋の悲劇がある。これは単に恋愛のことだけでなく総ての事に於てもそうであるとする

1) H. C. Duffin, *Thomas Hardy: A Study of the Wessex novels*. (Longmans, 1921) p. 152

Hardy の世界観に由来する。相対する二つのものは決して一つにはならない。ここに彼の宿命的悲劇が成立する。更に又この Clare の背後にある福音主義、偏狭な Puritanism に対する Hardy の反抗があることも見逃せない。Clare の実体は ‘Within the remote depths of his constitution, so gentle and affectionate as he was in general, there lay hidden a hard logical deposit, like a vein of metal in a soft loam, …’ (p. 310) なのである。

こういう Hardy の思想から来る外部的要素は Tess にどの様に影響しているか、又それがどういう plot となって展開しているか、次に Tess の内面的な面から見直してみようと思う。

### (3)

以上述べた外部的要素は Tess の内部的要素と相互に関係し、その因果関係から Tess の一生が展開するのであるが、この内部的要素として Tess に苦悩をもたらすものは Tess の精神的属性と肉体的属性との問題である。

先程述べたように、Tess はその口もとに幼子を彷彿させる純真さの影をたたえ、その心情も全く純粹そのものであった。所が一方肉体的にははずむような一人前の女らしさが溢れている。体つきの豊満さ、発育の大柄さ、花のような口 (flower-like mouth), 優さしい大きな目 (large tender eyes), 黒でも青でもスマイル色でもないそれ等全部集めたような瞳が彼女の肉体的属性である。Hardy はこの属性を ‘She had inherited the feature from her mother without the quality it denoted’ (p. 49) と説明している。H. C. Duffin はこの本の sub-title にある ‘a pure woman’ の ‘pure’ をこの遺伝の問題と関連してとり上げ、Tess の肉体的魅力は母親ゆずりのものであり、それは degeneration of the ancient blood を示すものであるとし、精神と肉体の不一致を指摘し ‘pure’ というのは Hardy が Tess の理想的な姿を意図したもので、実際の描写からみると ‘Hardy insists upon the fact that Tess is essentially animal in the neutral sense’ だとしている。<sup>1)</sup>

1) Ibid. p. 130~p. 132

もう一つは Tess の自尊心の強さである。Alec が自分の過失を詫び Tess に再び Trantridge に帰るよう頼むのに対し ‘…I have never really and truly loved you, and I think I never can…Perhaps, of all things, a lie on this thing would do the most good to me now; but I have honour enough left, little as ’tis, not to tell that lie…’(p. 101) と叫ばせ、彼をして ‘One would think you were a princess from your manner, in addition to a true and original d’Urberville——.’(p. 100) と語らせる程の精神的な気品と honour を最後まで持っている。これは Clare と結婚した晩に彼を裏切ることが出来なくて不安を感じながらも その良心の故に過去を告白せざるを得ないその良心だし、別れた後 Clare の家へ援助を求めに行き果さず帰ったことも、Alec の執拗な結婚申込を断り続けたのもこの Tess の貴族的精神性の成せる所である。この二つの属性は、Tess とかわりなく Tess の存在と共にある遺伝的なものであって自からの内で葛藤する Tess の苦悩の内部的宿命なのである。然しこれだけでは Tess の悲劇的な生涯に関係がない。例えば Eustacia の場合、彼女自体の燃えたぎる情熱がその置かれた Egdon の姿に耐えかねて自分の内から反抗する悲劇の炎となるが、Tess の場合、先程の外部的要素がこれに加って Tess の行動を規定し、彼女の苦しみを更に一層強くして行く。

馬を殺したという事件は Tess を大きく成長させる。一面に広がる血を見た彼女は無垢であればある程罪の意識が強くなる。‘Tis all my doing——all mine!…No excuse for me——none.’ (p. 37) と嘆く彼女は殺害と両親に対する罪の意識が芽生える。これが単なる倫理的意識にしる、ここで「生」に対する意識が生れたこと、即ち自分のあるべき位置をはっきり自覚したということは彼女が主人公の地位に立ったということである。ここで罪を補って生活を立てようとする決意が Tess を新たな「生」へと進ませる。が今度はその契機としてはどうしようもない ‘impulse’ の結果であるが結局 Tess の肉体的属性が Alec との過失の罪を招いたと言える。この時 Tess は ‘for my weakness’ という自己嫌悪を感じているだけで ‘my eyes were dazed by

you for a little, and that was all.' (p. 99) と片付ている。然し家に帰り皆と接するうちに成長した知性が彼女に罪を悟らせる。Tess の苦悩はここにある。即ち自分一個の世界では罪の意識はないが、それが社会的存在となった時初めて罪が意識される。これはたとえ自分の意志にかかわりなかったとは云え道徳上の罪で、社会という存在を認めたことから生じたものである。ここで自己と社会、換言すれば自我と因襲との **conflict** が生じるのである。この意識は如何に免れようと努力しても免れ得ない。Clare との恋の情熱の中でさえ一層罪の意識は消えない。この苦悩は彼女を Wessex の放浪へと旅立させるが、所詮人の世のこと、又自分の内にあるもの故その圧迫を免れることは出来ない。Tess の受けた苦悩は社会的因襲から逃れようとするもがきの悲劇的な生活であって、この世に存在すること自体が罪の意識の根源となって苦悩となって来る。ここに Hardy の大きな意味がある。Eustacia は成る程環境への反抗から死に到る悲劇の相をなしているが、若し何等かの手段で Egdon の荒地から抜け出せるとしたらそれ程の悲劇にならなかったであろう。とすればこの Tess に表わされた Hardy の意図はもっと本質的な人間存在自体の問題となる。「生れたことが苦しみである」という一つの命題が意図されているとみてよいであろう。然しこれで終らずに Marlott の人々特有の「成るように出来ているのだ」(p. 93) という fatalistic な環境から来る隋性的な諦めが忍従の「生」をもたらし一層の苦しみを蒙ることになる。

さてこうした社会の因襲を逃れようとする努力は一切の過去を葬り、自分の知られていない社会へと脱出し、同時に傷ついた肉体を意識外に葬り去ろうとする意識を生じ、逆に精神的な面が前面に出されて強調されるようになる。こういう精神と肉体の分離は Tess の特質を考えると容易に理解出来る。これは Alec との一件以来既に始っている。彼に犯されて逃げ帰る途中彼につかまり、再び kiss を求められた時次のように述べられている。

She thereupon turned round and lifted her face to his, and remained like a marble term while he imprinted a kiss upon her cheek—half

perfunctorily,.... Her eyes vaguely rested upon the remotest trees in the lane while the kiss was given, as though she were nearly unconscious of what he did. (p. 101)

このように Tess は精神 (honour) と肉体とを全く分離し、肉体を完全に意識外に置いてしまっている。その努力は逆に Tess を必要以上に精神的に昂揚させている。Cric 氏の搾乳場での Tess は次のように語っている。

'I do know that our souls can be made to go outside our bodies when we are alive....A very easy way to feel 'em go...is to lie on the grass at night and look straight up at some big star; and by fixing your mind upon it, you will soon find that you are hundreds and hundreds o' miles away from your body,...'(p. 156)

このように肉体を離れて自然や宇宙の流れの中に自己を没却することが Tess を大いに精神的純潔さへと高めている。さてこういう状態にあって先程述べたような Angel Clare と出会うと当然相引く恋愛が生じるし、それだけの素地が Tess にもあったのである。従って spiritual purity をその肉体に具現させている Tess は Clare のこの passionate な欲求に巻き込まれて真実愛の喜び、生の喜びを全身で感じるが、同時に肉体による罪の意識が生じ、真実の命の綱は快樂と苦痛の二本の撚り糸で撚り合わされているのを感じる。真の愛が精神と肉体の合体より成るとすれば、Tess の苦しみは生きようとする精神とそれを押えようとする肉体より来る良心との苦しみである。即ち「処女」の意味する社会因襲との葛藤である。然し Tess は自分の精神的な愛は肉体的欠陥をも凌駕するに充分だと感じ、Clare もその脱俗性をもって許してくれると思って自己の「生」に徹した。ここに Tess の Clare に対するどうすることも出来ない primal discord, 錯覚があったのである。Tess は自分の全生命を愛に燃やし、それが又社会の因襲からくる苦悩を救ってくれると思ったが見事に裏切られた。然し彼女の愛は崇高な域に達している。“...Having begun to love you, I love you for ever—in all changes, in all disgrace, because you are yourself.” (p. 295) と言い、別後の苦難な生活の中でも “But, Angel, please, please, not to be just—only a little

kind to me, even if I do not deserve it, and come to me! If you would come, I could die in your arms!" (p. 433) と書き送る。ここに現われた愛の深さ、生の激しさこそ Tess の最大の悲劇性を物語るものであり、この長編を支える情緒はここに集約されていると言える。やがて精神的愛に生きる苦難に耐えかねて再び執拗に迫る Alec の中に肉体的な「夫」を感じ自己の肉体に屈する。その後で再び Clare が現れるに及んで Tess は自己の肉体的属性と貴族的精神性という生れながら持つ宿命の要素それ自体によって完全に破壊されてしまう。‘…O, you have torn my life all to pieces…my own true husband will never, never——O god——I can't bear this! I cannot!’ (p. 495) と嘆き Alec を殺し Clare のもとへ走る。かくして Tess は初めて一切の苦悩——道徳や因襲——の綱を断ち喜んで死さえも迎えるのである。Tess の生涯はこの遺伝的な二つの要素に完全にもて遊ばれたことになる。これが Hardy の悲劇的な宿命観である。生れたからには生きなければならぬ。何一つ不当な悪も犯さずにただひたすらに運命に耐えて生きて行く Tess の限りなき努力に対して運命の不当に対する憤りと Tess への同情、憐みの感情がひしひしと脈打ち、最後に犯した殺人さえも同情をもよおすのである。

## (4)

さてここで *Tess of the d'Urbervilles* を通して Hardy は如何なる態度をとり結論を与えているか要約してみる。

先づ第一に Hardy は時間、空間を超越した悠久不変の Macrocosm を設定し、人間存在をその microcosm として対比し人間の不安定さ、はかなさを浮彫りにしている。Tess が弟と夜道を馬車で走る時次の様に述べている。‘…the star, whose cold pulses were beating amid the black hollows above, in serene dissociation from these two wisps of human life.’ (p. 34) として人間存在は宇宙から見るとほんの葉くづに過ぎず、人間の悲喜などふとしたその吐息でどうにでも変化するたわいないものだという意識がある。風の音は空間の上で宇宙につづき、時間の上で歴史に続く巨大な悲しい魂のも

らず溜息だと感じ生命の流れを認めるのである。**Egdon**の創造はその最たるものであるが、こういう認識のもとに人間を見て行く所に **Hardy** の創造の世界の源がある。従って人間存在を見る時、我々の理解をこえたある意志、例えば具体的に言えば我々の ‘**impulse**’ といったものに一切の生涯が支配されている。これは善でも悪でもなく唯ある宇宙の大なる意志であって人間の意志とは全く無関係である。従って人間存在の **primal discord** をもたらし人間を悲劇へと追い込むのである。

次に遺伝という形で表わされるその個人でどうしようもない宿命的な力があるという見解がある。**Tess** の悲劇的生涯も一つにはこれのもたらす宿命である。しかもこれはかつての名門 **the d'Urbervilles** の血を引くものとして **Tess** の悲劇を予告するような因果応報の東洋的宿命観にまで至っている。

更に宇宙の息吹を秘める大自然に対し文明社会を対比させている。これは田園に対する都会、肉体に対する精神、個人に対する社会と常に相対立する相をもって人間存在の苦悩を描いている。恋愛にしてもこれ等の関係から決して理想的な一致の愛の姿はとられていない。**Tess** の愛の苦しみは **Clare** に対する錯覚で、この様な対立した相も結局その現象の背後にある別個の「意志」のもたらす **primal discord** である。

このように **Hardy** は調和を求めるよりむしろ衝突または苦悩を冷静に見る一種のギリシャ的精神を求めている。このように見ると人間存在は如何なるものであろうか。生きた人間の存在は常に自我があり生きようとする意志がある。そこに **intellect** があれば人生に対する **sense of justice** がある。それを満足させようとする所に矛盾がある。そこから苦悩が生れる。それが人間の力でどうにもならないものである時、その苦悩を断ち切ることは出来ない。動植物は偶然の事件に支配されて不安な生活をなすものであるという **Darwin** の説により人間社会にそれをあてはめ、当時の哲学、宗教で証明され得ぬ存在の実体を知り、かつ又荒廃していく英国農業の実態を目にする時、**Hardy** の得た結論は **L. Abercrombie** が述べているように「存在自体が目的のない終りのない悲劇」<sup>1)</sup> だということであろう。然し **Hardy** はこの徹底し

1) **L. Abercrombie**: *Op. cit.* p. 100

た暗い世界観を持っているだけではない。例えば Tess が純潔を失って社会の因襲に苦しむのに対して ‘But this encompassment of her own characterization, based on shreds of convention, peopled by phantoms and voices antipathetic to her, was a sorry and mistaken creation of Tess’s fancy…It was they that were out of harmony with the actual world, not she.’ (p. 110) と述べ Tess が悪くて苦しむのでなくて、悪いのは彼女の中に巣喰う因襲なのだとしたり、最後の所でも ‘…the President of the Immortals…had ended his sport with Tess’ と述べて総て宇宙の意志の成せる業であって決して Tess 自体ではないとしている。即ち Hardy は Tess のこの悲劇的な一生を冷徹な目で眺めながら感情的には心からの同情と憐みを送る人道主義者なのである。